

人虎伝

李景亮

隴西の李徴は、皇族の子なり。虢略に家す。徴少くして博学、善く文を属す。弱冠にして州府貢に従ひ、時に名士と号す。天宝十五載の春、尚書右丞楊元の榜下に於いて、進士の第に登る。後数年、江南の尉に調補せらる。徴性疎逸にして、才を恃みて倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず。嘗に鬱鬱として樂しまず。同舍に会する毎に、既に酣にして、顧みて其の群官に謂ひて曰はく、「生乃ち君等と伍を為さんや。」と。其の僚友咸之を側目す。謝秩に及べば、則ち退き歸りて間適し、人と通ぜざる者、歳余に近し。後衣食に迫られ、乃ち東のかた呉楚の間に遊び、以て郡国の長吏に干む。徴呉楚に在りて、且に歳余ならんとし、獲る所の饋遺甚だ多し。西のかた虢略に帰らんとして、未だ至らず。汝墳の逆旅の中に舎り、忽ち疾を被りて発狂す。僕者を鞭捶す。其の苦しみに勝へず。是に於いて旬余にして、疾益甚だし。何も無く夜狂走し、其の適くところを知る莫し。

虎曰はく、「我が前身呉楚に客たり。去歳方に還らんとして、道に汝墳に次り、忽ち疾に嬰りて発狂す。夜戸外に吾が名を呼ぶ者有るを聞き、遂に声に応じて出で、山谷の間を走る。覚えず、左右の手を以て地を攫みて歩む。是れより心愈狼、力愈倍せるを覚ゆ。其の肱髀を視るに及びては、則ち毛の生ぜる有り。心甚だ之を異しむ。既にして溪に臨みて影を照らせば、已に虎と成れり。悲慟すること良久し。然れども尚ほ生物を攫みて食らふるに忍びざるなり。既に久しくして飢ゑて忍ぶべからず、遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避け、得る所無く飢ゑ益甚だし。一日婦人有り、山下より過ぐ。時に正に餒ゑ迫り、徘徊すること数四、自ら禁ずること能はず、遂に取りて食らふ。殊に甘美なるを覚ゆ。今其の首飾、猶ほ巖石の下に在るなり。是れより冕して乗る者、徒して行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、毛ありて馳狂す。夜戸外に吾が名を呼ぶ者有るを聞き、遂に声に応じて出で、山谷の間を走る。覚えず、左右の手を以て地を攫みて歩む。是れより心愈狼、力愈倍せるを覚ゆ。其の肱髀を視る

に及びては、則ち毛の生ぜる有り。心甚だ之を異しむ。既にして溪に臨みて影を照らせば、已に虎と成れり。悲慟すること良久し。然れども尚ほ生物を攫みて食らふるに忍びざるなり。既に久しくして飢ゑて忍ぶべからず、遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避け、得る所無く飢ゑ益甚だし。一日婦人有り、山下より過ぐ。時に正に餒ゑ迫り、徘徊すること数四、自ら禁ずること能はず、遂に取りて食らふ。殊に甘美なるを覚ゆ。今其の首飾、猶ほ巖石の下に在るなり。是れより冕して乗る者、徒して行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、毛ありて馳する者を見れば、力の及ぶ所、悉く擒りて之を阻み、立ちどころに尽くすを、率ね以て常と為す。妻孥を念ひ、朋友を思はざるに非ず。直だ行ひ神祇に負けるを以て、一旦化して異獸と為り、人に覷づる有り。故に分として見えず。」と。

「初め、我逆旅の中に於いて、疾の為に発狂し、既に荒山に入る。而して僕者我が乗馬を駆り衣囊もて悉く逃げ去る。吾が妻孥尚ほ號略に在り。豈に我化して異類と為るを知らんや。君南より回らば、為に書を齎して吾が妻子を訪ひ、但だ我已に死せりと云ひ、今日の事を言ふこと無かれ。之を志せ。」と。乃ち曰はく、「吾人の世に於いて、且つ資業無し。子有るも尚ほ稚く、固より自ら謀り難し。君は位周行に列し、素より風義を乗る。昔日の分、豈に他人能く右らんや。必ず其の孤弱を念ふを望む。時に之を賑恤し、道途に殍死せしむること無くんば、亦恩の大なる者なり。」と。言ひ已はりて、又悲泣す。慘も亦泣きて曰はく、「慘と足下とは休戚同じ。然らば則ち足下の子は亦慘の子なり。当に力めて厚命に逼るべし。又何ぞ其の至らざるを虞れんや。」と。

虎曰はく、「我に旧文数十編有り。未だ代に行はれず。遺藁有りと雖も、当に尽く散落すべし。君我が為に伝録せよ。誠に文人の口闕に列すること能はざるも、然れども亦子孫に伝ふるを貴ぶなり。」と。慘即ち僕を呼び筆を命じて、其の口に随ひて書かしむ。十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閲して歎ずる者、再三に至る。虎曰はく、「此れ吾が平生の業なり。又安くんぞ寝めて伝へざるを得んや。」と。既にして又曰はく、「吾詩一編を為らんと欲す。蓋し吾が外異

なりと雖も、而も中異なる所無きを表さんと欲す。亦以て吾が懐ひを道ひて、吾が憤りを攄べんと欲するなり。」と。慘復た吏に命じ、筆を以て之を授けしむ。詩に曰はく、

偶 狂疾に困りて殊類と成る

災患 相仍りて逃るべからず

今日は爪牙誰か敢へて敵せんや

当時は声跡共に相高かりき

我は異物と為りて蓬茅の下にあれども

君は已に輶に乗りて氣勢豪なり

此の夕べ溪山明月に対し

長嘯を成さずして但だ嘯を成すのみ、と。

慘之を覽て驚きて曰はく、「君の才行、我之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生自ら恨むこと有る無きを得んや。」と。虎曰はく、「二儀の物を造るや、固より親疎厚薄の間無からん。其の遇ふ所の時、遭ふ所の数のごときは、吾又知らざるなり。噫、顔子の不幸、冉有の斯の疾、尼父常て深く之を歎ぜり。若し其の自ら恨む所を反求せば、則ち吾も亦之れ有り。定めて此に困るを知らざらんや。吾故人に遇へば、則ち自ら匿す所無きなり。吾常に之を記す。南陽の郊外に於いて、嘗て一孀婦に私す。其の家竊かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は、是に由りて再びは合ふを得ず。吾困りて風に乗じて火を縦ち、一家数人、尽く之を焚殺して去る。此を恨みと為すのみ。」と。

別れを叙すること甚だ久し。慘乃ち再拝して馬に上り、草茅の中を回視すれば、悲泣聞くに忍びざる所あり。慘も亦大いに慟き、行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震へり。